

令和元年度 第2回四万十町文化的施設検討委員会 議事録

日 時 令和元年5月26日（日） 16:10～17:40

会 場 四万十町農村環境改善センター2階 大会議室

出席委員 内田純一、谷口和史、林 一将、山本哲資、高垣恵一、池田十三生、林 伸一、
青木香奈子、下元洋子、酒井紀子、刈谷明子

欠席委員 川添節子、田邊法人、友永純子、中平浩太

事務局 川上哲男教育長、熊谷敏郎教育次長

生涯学習課（林瑞穂課長、味元伸二郎副課長、森山典将主幹、松田佐穂主任）

図書館・美術館（長木千葉美、谷脇八代美、武内真紀、山地順子、山口香）

（事務局）

それでは、令和元年度第2回文化的施設検討委員会を始めます。

さっそくですが議事に入りたいと思います。内田先生、よろしくお願いします。

（内田委員長）

はい。よろしくお願いします。

まずは皆さんから渡辺梓さんの講演会の感想を伺いながら、基本計画骨子を煮詰めていきたいと思います。

お手元に基本計画の目次案があるでしょうが、前回の協議を踏まえて、岡本さんにも気になる項目があったら加えていただいて、岡本さんにご紹介いただきます。

それでは、渡辺さんのお話を伺ったご感想を率直に出していただきたいと思います

私としては、どのような施設をどのように作るかが重視されながらも、改めて「なぜ作るのか」を考えました。内容と方法だけではなく目的ですね。

そもその今日のお話はとても大事な点であると伺っておりました。一人一人が、どんなに小さくても、自負、今日まで生きてきたプライドを持っていて、地域の個性を伸ばしていくためにこそこの施設があるんだ、と私なりに勉強させていただきました。

基本計画の意義・理念とも結びつくところでして、もう少し言葉を膨らませることができる感じがしております。

どなたからでも結構ですので、渡辺さんのお話を伺ったの感想を出していただきたいです。

(刈谷委員)

渡辺さん、今日はありがとうございました。

渡辺さんは横浜にお住まいとのことですが、今の横浜の特徴や特性など、どういうものなのかを伺いたいです。

(渡辺講師)

私も横浜に住み始めてまだ数年ですが、自分がそこで生活して実感したことは、横浜はやはり音楽とアートの街で、芸術で街を活かそうとしている。そこに力を入れて何年もやってきたんですが、それに関わった若手のアーティストたちが段々と力ある立場、認められる立場になってきて、そこから第二段階が始まっている感じはします。

同時に、横浜の人たち全部が横浜出身というわけではないので、横浜の昔からの文化が入ってくることはなく、そのコンセプトの下に才能を外へ出していこうという面では形になってきたんじゃないかなと思います。

(ARG岡本)

(横浜は)港町であることが大きな特徴です。つまり常に外から新しいものが入ってくることを前提とした街であるのは良いと思っています。

もう一つ、よその土地で仕事をしていて楽だと感じることは、横浜にはしがらみがない。何と言ってもまだ開港160年。その前はどうかだったかという、10軒くらいしか住んでいる人がいなかったんです。今は378万人くらい住んでる大都市ですが、元は10軒。つまり老舗や顔役がいらないんです。何が何でも無視できない人がいないではないですが、ほぼ港湾関係者です。関東大震災や横浜大空襲で(人が)かなり散り散りになったので、横浜に100年住んでいる人なんて会ったこともありません。それが良い所は、人がよそから入って来やすい。

ただ一方で課題に感じるのは、ほっといてもまあまあ人口が増えるので努力をしない。例えば大きめのイベントをやって集客しとけばそれでよし！ というところが強くあると感じています。決していいことではないと思っています。今はまだ、横浜は成長してるほうの都市だからいいですが、実は横浜市でも微妙に人口は減り始めてます。それなのに今までの時代と同じ生き方をしていくのは危険だと思います。

あと横浜に住みたいと思っている人が気をつける点は、横浜は、文化政策レベルは最低だということですね。行政がそこにお金を出さない。横浜では一区に一館しか図書館がありません。一区20~30万人住んでいて、図書館が足りない。その辺の文教政策の弱さはすごく言われます。

私は横浜で育ってきたので、育ってから知りましたが、中学校に給食がない。四万十町にはありますよね？ 私は高校生まで、中学校に給食があるのが当たり前だと知りませんでした。横浜ではお母さんたちが中学3年間毎日、お弁当を作らないといけないんです。学校給食実現の動きはあるんですが、横浜市がそれに頷いたことは一度もありません。でも育ち盛りの大事な時期に学校給食があることは大事だと思いますし、共働きの家庭が多い今の生活スタイルに

はもはや馴染まないと思うんですね。そこが（横浜は）ちょっといい加減だと思っています。

つまり、ほっといても人が集まるから、人に定住していただくために必要な教育の足腰が弱いのが横浜市だと思います。

別の見方で四万十町に役に立つ言い方をするのであれば、そういう大都市が適当にしていることをきちんとやるってすごく大事だと思います。

今までは比較的図書館の話で進んでますが、今日、渡辺さんに美術館も見ていただきました。書の展示をされてますけどああいう物がきちんとある。ギャラリーの山本さんの所にも伺いました。ギャラリーがあって写真展が開催されてる。こういう文化的な豊かさをもっともっと豊かにしていくことは、この町の大きな魅力になります。実はそこは横浜のような大都市と四万十町が戦う時の大きなポイントで、そこにみんなで投資しようというのは非常に良い考え方だと思っています。

（内田委員長）

ありがとうございました。

実は四万十町は文化的な活動をしっかりやってきていることを再評価して、この文化的施設をどういうふうに作っていくかをもう一度考える必要があるし、今日はそのきっかけの一つだったと思います。

渡辺さんの言葉を借りるなら、安心して相乗効果を体験できる場。特に美術館関連の話で感じたことがあれば意見を出していただきたいです。

（高垣委員）

私は町立美術館の運営審議会を長年務めています。

美術館が今のままではいけないと言いながらも、今までの委員さんたちは次々と辞めていかれました。昔、法務局が須崎市に合併となって、空いた法務局の建物を曲がりなりにも美術館に使えるようになって、大変喜びました。

ですが段々と、展示スペースが少ないとか、図書館にも大正分館が出来て、そうなるのと、一番足りないのは人ではなかったかと思うんです。学芸員を初め、そこで働く人たちが足りないと思います。行政が、文化的な部分にはお金が回らないとのことで、とても図書館や美術館に目を向けてくれるとは思えなかった。

この委員会の一番初めに色々と視察に行きましたよね？　そこで大正の営林署を見学した時に、「これは贅沢言えんわ」という感想を持ったんです。こういういくつも整備しないといけない場所が残ってるのに、美術館をもっと広くしろなんて無理だと思いました。

私の小さい理想が、美術館にもっと展示スペースがあって、子供もお年寄りも誰でも見られて楽しめる図書館というふうにあります。そこで働く人がもっといてほしい。

前回、人工知能の映像を観て、このままだと人が要らなくなるなと感じて、私の思いと違うという感想を持ったんです。

今日、渡辺さんのお話を聞いて、私はこれを思っていた、こういうことを言いたいと思って

いたと思いました。

場所は決まってませんが、十和の同僚が「窪川のどこに出来たとしても、十和や大正の者はここまで来れん」と言うのを聞いて、窪川にだけ立派なものが出来てもいかなど。大正へも十和へも、人が集まれる場所を作らないといけないと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

この会自体が「こんなこと言ったら理想が高すぎて無理じゃないか？」とか考える必要はないと私は考えておまして、むしろ「こういうことをやってみようよ！」と目指すものをどんどん出して行って、できるところから手を付ける。むしろそれがないと。最初から「この程度で」みたいになったら、今日の渡辺さんの話じゃないんですが、いいものが出来なくて、出来たとしても結局ハコだけで、みたいな話もございましたので、目指すものをどんどん出していく会にしたいですし、高垣さんがおっしゃったように今日はいいい機会だったと思います。

ありがとうございます。

もう少し美術館と図書館を一体的にやっていくのが特色だという話を前回して、渡辺さんの言葉を借りれば「相乗効果」なのかと思いますし、美術と図書の相乗効果だけではなく、日常と非日常の相乗効果によって、若者がずっと抱いていた思いがぐっと外に出てくるなどの話も今日頂きました。

山本先生、いかがですか？

(山本委員)

(渡辺さん、) いい話をありがとうございました。

一番印象に残ったのは、「小さいものを大事にする」、要するにその裏の歴史を感じながら対処するというところにすごく感心しました。

個人的な話ですが、高垣先生がおっしゃったように、美術館と図書館を作るには、人を育てる。学芸員がない、図書専門の職員がないとなると、いいものを作っても活用できません。ですので人材を育てることを柱に明記していただきたい。

香美市立美術館では、全国からいい作品を集めるという運営で、お金はかかりますが、県立美術館より位置づけが高くなっていることもあります。

やっぱりいいものをみんなに紹介する美術館、それからみんなが楽しめる図書館。

図書館とはそぐわないですが、音楽が聴ける図書館というのが大事になると僕個人は思います。

最終的には、物と歴史を大事にする文化を創造する四万十町になってほしいと感じました。

ありがとうございました。

(内田委員長)

ありがとうございました。

音楽も一歩踏み込んで我々も考えていきたいですね。

先ほど横浜の話をした時に、芸術と音楽だとおっしゃってましたが、音楽は人を繋ぐ大事なものですし、音楽といっても多様にありますよね。今回どういうふうに行けるとこに盛り込むか、非常に大事なキーワードだと思います。

(酒井委員)

(渡辺さん、) ありがとうございます。

渡辺さんのお話では、一つのビルの中で交流を持たせる導線を意識しているとのこと、意外に演劇と音楽とアートに絡みがなくて、あえてこちらが誘導してあげないと上手く相乗効果生まれにくいところを工夫されていました。

そういうのが新しく出来る施設にも欲しいし、十和と大正と取り組みが繋がって導線が出来る成功事例が出来たら、それが他にはない四万十町の特色になると思いました。

そういう思いやアイデアが形になるためには、レファレンス機能が発達して、相談したら形になる。言葉にしたら冷たいかもしれませんが、ビジネス支援みたいに、トタンをここに売ればお金になるとか、この人に提供すれば形にしてくれるということが、頭に浮かんでも誰に相談していいかも分からない状況が四万十町では多発しています。

人が育ったり、ここに行けばアイデアが形になるという安心感とか、開放された場所があるかないかで全く育ってくる場が違います。そこに住まなくてもここに行けば面白い人にどんどん繋がってもらえる安心感があれば、どんどん面白い人も入ってくると思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

ここでもアイデアが形になるということは大事にしたいですし、「相談」という機能も、専門職の人がいればという話でもありますが、そういう中でもより相談機能を担える専門家というか、従来の専門家と違った、この施設だからこそ求めたい専門性は出せるように思います。導線もそうですね。館内の導線はもちろん地域の導線をどうするか、四万十町としての課題ですね。

(下元委員)

ありがとうございます。スクリーンもとても素敵でびっくりしました。

スクリーンを拝見して、ここは取り入れられるのではないかと思ったところがありました。参加型の美術活動って、田舎だとなかなかないです。それが新しい「開かれた図書館・美術館」を考えた時に外でもできるんですね。パフォーマンスを見て参加していただくことって、ただ絵を見るよりもっと参加してもらいやすいし、興味を持ってもらいやすいと感じました。

演劇活動も、何もないところから始めて、空間の中でやってしまわれてる。それも子供さんたちが楽しんでいる雰囲気伝わってきました。本当に素敵な活動をされてるんだと感心させられました。演劇活動についても、四万十町で子供たちに演劇を楽しんでもらいたいと始めてい

る子がいます。その子たちも今日のスクリーンを見ていたく感動していました。

四万十町の新しい施設でもこれが取り入れられて、町民が今まで見たことない、やったことない、触れたことない、興味自体湧かない無知な状態にあるものを、新しい発見と、自分が参加できるという状態にできるんじゃないかなって思って、やっていきたいと思いました。ありがとうございます。

(内田委員長)

ありがとうございます。

演劇や音楽も新しい文化的施設に入れていこうということですよ。

(林(一)委員)

すみません、事務局にお聞きします。

図書館と美術館ということで我々（委員会に）出ておりますが、委員に任命した時には図書館・美術館に加えて、窪川・大正・十和と離れている郷土資料といった先人先祖のものも非常に大事であり、大正なんかは膨大な物が埃をかぶっている残念な風景も見られます。

特にそういう点で私は町長のお話も聞いておりましたが、初期は郷土資料館も加えたものとして発言され、タイトルにも出ておりました。しかし最近では「図書館・美術館が開く四万十町の未来」と二つに要約されて、郷土資料のことが委員会でもほとんど論議されなくなりました。

例えば、膨大な資料がある、一般の役場等の行政文書、あるいは江戸時代の古い文書、そういったものは公文書館を作ることが義務化されています。別個にこのようなものを作ることが好ましいと思いますが、四万十町クラスでは無理だという気もします。

その辺りも含めて、資料館は相当なウェイトを占めます。表現として「図書館・美術館・郷土資料館」という形で重きを置いて、整備をしなければならない。私は何度も委員会にお話ししておりますが、何とか、古代から四万十町に残った色んな物が発掘されて、県下でも珍しいとして残っております。郷土資料館がありませんので神社に保管していますが、非常に危ない気もします。そういうことで、地域の人たちの関心を深めるのが大事なので、文化的施設が資料館を加えた形で進めるべきだと思いますが、事務局側で分かれば返答お願いしたいと思います。

それから、この事業を進めるには人が大事ですが、学芸員などを発言させてもらっておりますので、ちゃんと基本計画を進めるべきではないかと。

(事務局)

まず郷土資料について。民具についてはこの会の初期に全て收容するのは難しいので一端切り離して考えて、今後大事な課題として捉えていこうと整理はしました。

郷土資料は、文化財として保存しているものもあり、各地の古文書などは図書館でも保管できると考えておりますが、具体的な案や取り組みは、教育委員会の中でも協議できていないの

が現状です。検討委員会の中でも充分協議していただき、こちらについてもこれから肉付けしていただく基本計画の中に入れていただくのがいいというのが今の考えです。

それと、人の問題ですね。新しい文化的施設が出来るに当たって今の人員体制でいいのかというと、今のままでは専門性のある職員も少ないです。

実はおととい、企画課で人員体制についてのヒアリングがありました。その中で、教育委員会としては、専門性のある職員の採用を意見として述べております。どういうことになるかは執行部との話の中で肉付けされてきますが、基本計画では避けて通れない問題ですので、教育委員会としては充分問題として捉えているというところで答えとさせていただきます。

(内田委員長)

ありがとうございます。

自然、それから歴史文化、芸術の豊かな蓄積のある四万十町という町で暮らし続ける、あるいは暮らしている人々の自己実現を図る施設を作ろうということですから、民具や郷土資料が必要ないと言っているわけではないですが、それ自体をどう保存していくかになると、もう一歩踏み込んで考えていく必要があります。

元・大正営林署の中にはたくさんの民具が整理されないまま置かれている、そこは何とかしたいという思いはありますが、林課長がおっしゃったようにそういう品をどう活かすかという点で、基本計画に書き込める点はあるかと思えます。

(林(一)委員)

すみません、もう一点。

町長の最初の挨拶でも、郷土資料も合わせた形で、図書館・美術館・郷土資料館を作りますとあった気がしますが、その通りで、郷土資料は大事ですし、県下に後れを取らない縄文・弥生時代の物も発掘されました。それらがどんどん高知市へ行って四万十町には残らないのが現状です。

そういった点を含めて、「図書館・美術館・郷土資料館」とサブタイトルを付けて進めていただきたいと私は思っています。

(ARG岡本)

ご懸念はもっともです。これは、言葉を広く捉えておけばいいと思っています。

「図書館」「美術館」という言葉自体も誤解を与えかねないかと私は思っていました。単に作品を展示し収蔵するだけの美術館ではなく、中高生ワークショップで「アトリエのような機能が欲しい」という声があったように、まさにネーミングをどうしていくか。

単純に「四万十町立美術館」などになるのか、新しい機能を生み出すのか、そこは議論する必要があります。その意味で「ミュージアム」は、基本的には何でも扱うんですよ。大英博物館は美術品から広報資料まで何でも持ってます。ですから「ミュージアム」のように広く捉えておけば、いま林先生がおっしゃった考えが叶うと思えます。

現実問題として、私も見学しましたが（資料の）ボリュームがすごいので、一つの施設で全てを賄うことは難しいです。リスク管理の観点からも、先般もブラジルの国立博物館が丸焼けになって資料がほとんど焼失したことがありましたので、一か所に集めることも考えたほうがいいです。

もう一つ、図書館の観点から言いますと、図書館法上、郷土資料は図書館の収集対象資料です。「図書やその他の資料」とあります。つまり法律をそのまま読み解くと、図書館は紙の本や雑誌を収集するに留まっていいわけでは決してありません。郷土資料として現物を集めることも図書館の役割であると、法的には解釈しえます。その辺も踏まえながら議論していくのもいいと思います。

林先生の「図書館・美術館・郷土資料館」とした場合、引っかかるのが、郷土資料館は法的根拠が弱いんです。図書館と美術館は法的根拠が明確にある施設ですが、郷土資料館はあくまでミュージアムの一形態と捉えられるのが一般的です。

なので、そこを無理に考えるよりは、図書館と美術館の解釈を、委員会の中で広く捉えておくように考えるといいのではないのでしょうか。その中で実際に何を残すべきか、何をこの文化的施設の中に取り込むべきか、踏み込んで詰めることがこれからできればいいと思います。

（刈谷委員）

基本計画の4のイの「広域な町全体に開かれ、各地域をつなぐ」の項で思ったことです。

私も林さんと同じく図書館協議会で、図書館についての話し合いをしています。その中で、窪川にある図書館を普段利用されている方は、職員さんがていねいに膨大な量の仕事をされてとても有難いという声をよく聞きます。普段利用されている、顔が見える関係の方にはすごくいい環境であることが垣間見えます。

新しく文化的施設が出来た時にも、窪川の人にとっては図書館がリニューアルしたくらいの印象でしょうが、十和地域にはそういう場所がありません。現在のサービスも地域ごとに差があります。ですので、十和の住民からすると、今ある図書館が新しくなるのではなく、町内全域にサービスしてくれる、今までなかったものが出来るという認識になるのかなと思いました。

この「全域サービスの可能性」の項で、「十和地区分館の可能性」が明記されていて驚きました。ただ、今の段階ではその話は無いので、できないという前提で話すと、図書館からのサービス発信のやり方が、これまで図書館のある地域に住んでいた人と、図書館がない地域の人への働きかけは絶対違うと思うんです。

図書館に来れば情報が見られるし触れられる所に普段住んでいる、そういう環境が身近にある人は「ここに行けばいい」というのがあるけど、元々無い所に住んでいる人には無いのが当たり前なので、新しいものが出来ました、ここでこういうサービスが受けられます、と言われても、初めての場所に行って、どういうふうに自分が使えるのかが分からない人も多いでしょう。

なので、「図書館」「美術品」と名前の付いてない地域に住む人への働きかけが、ただ「開

いてます。色々やっています」じゃなくて、一步踏み込んで、実際にこういう使い方ができる施設なんだということを、「全域サービスの可能性」でもう少し明確に、計画の段階で話し合えたらなと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

こういう広域な町の中で各地を繋ぐという言い方をしながら、具体的な中身を岡本さんに書いていただいているんですけど、さらにそれを実現するための基礎的な学習や情報提供を合わせてやっていくことが必要で、サービスを使える力をみんなで付け合うみたいな。それが並行していなければ、「やっていますよ」だけじゃだめだということですよ。

岡本さん、この話題について何かご発言いただければ。

(ARG岡本)

刈谷さんの気になる項目ですが、これはいずれ委員会で正面から議論をしたほうがいいです。一貫して問題になっているのは「窪川だけが発展すればよいか？」です。

大正には立派な分館がありますが、このままだと十和地域だけ置き去りにされてしまうと委員会で何度も指摘されてきました。一年前に比べるとこの問題に関して委員会内で共通認識があって、それはやっぱり良いことではないということです。無理やりバランスを取ることはないけど、何かしらの配慮は必要だという合意が出来てきています。財源にも影響する問題ですが、やはりどれくらいのものなのかを今後ご議論いただきたく思います。

前回の研修で、下吹越香館長にお越しいただいて隈なく（図書館設備を）見ていただきましたが、「現実問題、厳しい」ということもおっしゃってました。

あとで話した時、下吹越館長は、指宿市は旧開聞町の図書館分室を失ったことがまずかったと言っていました。三自治体合併して、開聞町だけ行政サービスが急落したことが、自治体の中で見た時のバランスの悪さ、その地域での子育てのしにくさといった問題に繋がり、結局それが下吹越館長がブックカフェを始めるきっかけになったんですよ。

どのようなバランスのとり方をするのかはきちんと皆様で議論して決めたほうが良いと思います。それが行財政の関係から実現できるかはまた問題になるでしょうが、この委員会の中においては委員の皆様が自主的にご議論されたほうがよいと思います。その時に、ボンと施設を建てるのか、配送を充実させるのか、色んな幸せの作り方があって良いでしょう。それを地域実情に合わせて何が一番幸せなのか、一つに決めきれものではないですが、よくお考えくださる必要があります。

実際、移動図書館があればと言われる一方で、今のライフサイクルで時間を決めて来る移動図書館は使いにくいという声も普通にあります。本当にどういう形がいいのかは実際にお考えいただければと思います。

そういう意味では、今日の渡辺さんの講演であれだけの人が集まってくださったことは意義あることです。中でも酒井さんと下元さんが、前回から取り組んでノートを作ってください

こと、まさにこういったサポーター団体が立ち上がりかけるとこまで来ていることだと思います。ノートを回したら手に取りはするけどまだまだという感じが今ですが、積み重ねていけば必ず「私書いたよ」とか言ってくれるおばあちゃんが出てくるようになります。

これは実践とセットだと思いますが、協同をどうしていくかを具体的にご議論いただくと思います。講演の場で酒井さんが町民の皆さんに向かって一緒にやりましょうと呼びかけたことは本当に意義があったと思います。下元さんと酒井さんには本当に感謝しております。

最後は映像空間。前回、動画で見ていただいた映像型空間をどれだけ盛り込んでいくか、議論の方向性について書いています。

スケジュールを詰めていかないといけません。第一章に関してもうちょっと議論しつつ、利用体験ストーリーを作るとこまではケリをつけたいと思っています。ここまで進めば第三章で具体的な話ができます。第四章は事務なので私どもと事務局と相談して起案できます。

年度が始まったばかりなのにペースが速いのは、今年度は設計事業者の選定まで進みたいからです。設計事業者を公募する際にこの計画をある程度、案の段階でも構いませんが、こういうものを作りたいんだと提示しないと、設計案を作りようがないです。なのでできれば今年度前半で基本計画のご議論がさらに進捗するとよいと思います。

(酒井委員)

今の内に、岡本さんから出た話で細かいことについてですが、どこまで委員や一般人が言及していいか迷っている部分があります。

例えば今日の集客はあの人数でよかったのか。チラシをこれだけ配って、ケーブルテレビでも放送して、あの内訳ですよね？ 役場関係者のほうが多かったのかもしれないし、本当に周知されたのかのふり返りです。

図書館の方々は本当によくやってくれていて、私なんかしょっちゅう遅れているのに（議場に入ってくれて本当に助かっています。

だとしても、下吹越館長が来た時は、指定管理を受けているだけあって緊張感が違うと感じて、日々学んで成果を出さなければという姿勢を感じました。この町であれば、やったらやっただけやりがいを感じられる仕組み。

協同であれば窪川をよく知る人がいるでしょうし、大正も十和も地域性が全く違うので、地域と図書関係やミュージアムを愛している人たちがやっているサポーター団体と運営していくとか、運営に関してはどういう考えがあるのかなと思って。やっぱり行政が窪川で一括して回していくお考えなのか。

やってる方にもこれだけやったから発表したいとかのやりがいが必要と思うし、やってもやらなくても一緒ならやれることしかやらないってことになるから、そういった工夫は小さくてもできると思って。

全然関係ないところですけど、前は図書館に意見箱があったけど、その中に子どもたちが落書きを入れたから、関係ない投書があるからどけましたって言われたけど、そういうのは入ってくる予想内のことであって、置かないっていう選択肢はおかしいんじゃない？ って私も言わ

れたことがあって。そういう小さいところから工夫できたらいいのかなって思います。

(内田委員長)

そこは、酒井さんたちがノートを回そうと言ったのがよかったと岡本さんにもおっしゃっていただきましたし、具体的にこういう声が出る形にしましょうということですけど。もっともっとやれることがあるんじゃないかということですよ？ そこについてどんなことをやっていくか、どういう動きを作るかですよ？

今後の予定では、フォーラムを開いたり8月に猪谷さんをお呼びしたりとありますが。

実際にもっと動きが出てくるんじゃないかとか、働きかけができるんだとしたら、もっと声をかけることが公的にできないかですよ？

(酒井委員)

いや、ですけど、図書館の職員が個々人で頑張る姿は、評価されないというところもあると思うんです。今日のことなんかも、たくさんチラシ撒いて人を呼んだという成果が見えれば気持ちは出てくるけど、人任せにしてしまいがちじゃないですか。

責任を取ってくれという話じゃなくて、表現が難しいんですけど、色んなものが曖昧だから、どうやってモチベーションを上げていくのか。

新しいのが完全に出来たとしても、同じことが起きても不思議はないと思って。

そういう仕組み作りを上手くやっていると、あるんでしょうか、岡本さん？ 共同で運営しているとか、指定管理を完全にしていると結構あると思いますが、行政とサポーター団体が共同でやっていると。

(ARG岡本)

図書館、美術館の運営そのものを完全に協働というとならぬですね。扱い方が難しいです。

図書館で言えば、何の本を借りているかはその方の思想信条に関わる部分です。例えば今日ここにいらっしゃる図書館司書の皆さんは、誰が何を借りたか絶対に他人に漏らしません。公務員は正規であれ非正規であれ漏らしたらクビです。そのくらい強い倫理観や規範意識や遵法精神が求められます。住民と協働の場合、うっかり住民が情報を漏らした場合、誰が責任を取るか問題が発生してしまう。そこが一つの大きな課題です。

ちなみに、私はいいとは思いませんが、協同的にやっているケースは宮崎市です。図書館ボランティアに委託しています。でもかなり問題だと思います。ボランティアの方々がどのような責任を負って住民情報を覗いていいのか説明できていません。

一方で、仕組みがそうだから難しいと言ってたら地方自治は進みません。ですから本気で住民と協同で運営するならば、それに最適なやり方を作る必要があります。法的に可能な範囲では、町民も出資して図書館の管理を担う会社なりを作る。町民が経営者責任を負うというやり方はありえます。

あと有名なケースではニューヨーク公共図書館。運営責任者はあくまで設置者のNPOです。

ニューヨーク市は金を出しているに過ぎません。そういう思い切った形まで踏み込むか。佐川町に青山文庫がありますが、佐川町のベースは私営図書館であって、そういう私設図書館が活躍した例は日本にいくつもあります。

やり方を今の時代に合わせて工夫することは欠かせません。特に施設を作ることは、四万十町の財政力や合併特例債がまだ使えることを考えると、問題ありません。ただし、人口が減り続ける中で、維持管理費をいかに捻出し続けていくか。それも50年くらいの長さで考えないと、将来世代に多大な借金を残すことになります。

特に図書館で難しいのは、美術館は入場料が取れますが、図書館は利用の対価を一切取ることができません。これは国の法律なので、一自治体レベルで変えられることはありません。そうすると利用者が増えれば増えるほど対応コストが上がる、つまりヒットすればするほど赤字が大きくなるんです。それをどうやって、町財政に影響を与えず回していくか。そのためには町民との協同が必要になりますが、どの部分で協同することで、いかにしてコスト削減をするかです。例えば長野県や神奈川県だと、配送に市民ボランティアが積極的に関わるとか。

ですから、町民が自力で担える部分と、どうあってもそこは役場職員が責任を持って町民の皆様を支える部分と、二つに分けて考える必要が今後あります。

(内田委員長)

ありがとうございました。

協同の仕組みを作っていくのは、立ち上がったからのことももっと考えなきゃいけないというお話でしたが、そもそも渡辺さんの講演があったと知らせるのは誰がやるのか、ということですよ？ あるいは、皆さんが思ったことをどうやって聞いてくるんですかという、聞く仕組み。そういう所ですよ？ やっぱりこう、盛り上がりを作っていこうという私たちの思いは共通したのがありますよね。勝手に誰かが作って建てるんじゃなくて、町民の皆さんが参加・協同しながら作っていく、建物が出来上がっていくことでもっと盛り上がっていく。そういう方向性を作る動きはあるわけですよ。ですからもっと具体的にスピード感を持ってできないかというようなことですよ？

(酒井委員)

前から言ってますけど投書箱でも置いていただければいいものを、何せ参画する機会がないのが実情なんですよ。箱すらないから。箱はいつでも置ける気がするんですけどそんなにハードル高いんですか？

(図書館員)

あの、すいません、箱は置いてますよ。

だいぶ前から置いてまして、文化的施設検討委員会が始まった頃は、ちょっとでも声を出してもらおうと思って、窓口でも声かけしてたんです。それから、窓口だとちょっと入れる人が照れるかなと思って、手前の通路に置き場を変えました。初期に意見が出尽くした頃合いを見

計らって、ここからはご自由にどうぞという意味で置いたんです。

(酒井委員)

え、そうなんですか？

あの、すいませんでした。

(ARG岡本)

今日の来場数は、私は多いと思いました。イベントラッシュのこの時期、今日も須崎で大きなイベントをやってますよね。5月のイベント続きの日曜日、しかも今日は午前中に防災講演会があったようで、その中ではかなり来たと言ってよいです。

今日は具体的に何人いらっしゃいました？

(事務局)

80～90人ほど来ました。

その内、町外から一人、県外から一人来ました。

(ARG岡本)

まあまあかと思います。この段階でイベントやって50人越えは、自治体の規模に関わらず大きなハードルです。

一つ申したいのは、段階的プロセスを踏んでいくことです。一年前に比べれば、ノートを回すことが実現しました。今日の講演会や下吹越館長の研修も実現しました。7月には町民フォーラムをやり、8月には猪谷千香さんをお呼びすると、かなりしっかりやっていると言って良いと思います。

大事なのは停滞させずに一歩ずつ進んでいくことです。

今年は11月の米こめフェスタでのイベント予定もありますし、以前お話しした西ノ島町の縁側カフェのイベントを四万十町バージョンでやろうという考えもありますので。

とにかく途絶えさせないことですね。止めずに、後退させずに、でも一つ一つの積み上げはすごく地道なものになるでしょう。ただ今日のような場をきちんと一回一回やっていけば、設計案が出る頃にかなり盛り上がってます。

難しいところは、こういう文書を見て関心を持てる人は一部です。決していいことではないですが、こういう建物が出来ますよと報道された瞬間に、一気に関心は跳ねます。それは待つしかないです。今日良かったことは、高知新聞が来てずいぶん熱心に聞いてくださって、地域紙の記事としてちゃんとお伝えできますよと言ってくださったので、こういう機会を見つけては高知新聞に記事にさせていただいて、町民に緩やかに浸透を図っていくことです。まだまだ大丈夫だという気がいたします。

(内田委員長)

ありがとうございました。

それでは、次回の予定を事務局からお話しいたします。

(事務局)

はい。6月の内子町視察ですが、参加することが分かっている方はこの場で手を挙げてください。挙げた方は出欠の確認を取らないでそのまま手配を進めます。よろしくお願いします。

もう一つ。7月13日に町民フォーラムの話が出ていましたが、議題とテーマを少し。チラシを配布する際にテーマが入っていないと作れないので。

(ARG岡本)

端的に、今出ている、どうしたらもっと町民の皆様を知ってもらえるのかをやればいいんじゃないでしょうか？

(事務局)

では今出ました岡本さんの話と、事務局で作って、という形で構いませんか？

【反対意見なし】

(事務局)

あとは、7/13は図書館の「えほんのはこ」というイベントと一緒にやろうと考えてまして、講師の秋本美津先生にも参加していただきます。委員会だけの図書館フォーラムでなく、もっと広い形でのフォーラムということでやりたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

細かい予定が出来たらまた委員会からお知らせします。

(内田委員長)

今日は渡辺さんに来ていただきまして、改めてありがとうございました。

これで第2回検討委員会を閉じさせていただきます。

3 閉会